

明治三十七年二月十四日第三種郵便物認可(毎月一回二十五日發行)
明治四十年十一月二十五日發行

銀

鈴

第貳拾七號

銀 鈴

第廿七號

明治四十年十一月五日發行
紅葉號

文壇偶語

銀鈴社同人

○秋聲氏の近業 近ごろ目覺しきは硯友社の一人徳田秋聲氏が新秋に入りてよりの努力なり。自ら心血を灑がひと誓へる「讀賣」の「凋落」を初め、「新小説」に「孫」あり、「中央公論」に「犠牲」あり、短篇にして、未だ氏が手腕を輕重せしめざるべしと雖も、筆致の漸やく

圓熟し渾成し來れるは掩ふべからず、氏が前途や、蓋、括目を値すべし。

○東京市歌募集の失敗 小學兒童の口唱に

適すべき東京市の市歌募集に入選せる、その第一等を發表せられたるを見て、拙劣殆んど歌を成さざるものなるに一驚せり、審査に與れる人々も亦自ら之を認めたりと云ふ、さらば公等の舉措、何ぞ一步を進めこの旨を以て募集期限の延長に出でざりし。一篇八十句中一句の吾人を肯かしむるものなし、中にも極めて陳腐幼劣なるものを擧ぐれば、

「はまれは高輪泉岳寺」

「しよくますくとゝのうつ」

「國家有爲の人材を」

「養ふために設けたる」

「遊ばむ公園數多し」

「盛大にこそ向ふなれ」

「製造場と知られたり」

「かく隆盛に赴むける」

等。座談なり、平語なり、否吾人日常の座談
平語としても如斯く没趣味没風流なるものは
成るべく避けて用ゐざるを常とす、其他全篇
獸味あり、卑俗なる辭句にのみ満ちて、何等
典雅優麗の姿致を見ず、かくても東京市歌と
しての存在を容すべきや

○自然主義 文壇又々自然主義といへる一

旗幟の樹らしを見る、藤村、獨歩、花袋など

の人々が抑々この派の作家なりと云ふ。吾人は
自然主義のいかなるものなりやを知らず、
將た、泡鳴とか云へる人の議論さへ判らねば
、善いの悪いのと騒ぎはせざるべきも、讀
んで面白くなき小説は、頭から吾人の與し能
はぬ所なり。人生の暗黒面は光明面にてもよ
し、眞に宇宙と人間との機微に到達したるも
のい、わが文壇に現はれむことをこそ祈れ。

○竹風の所謂厭妻的小説 斯壇の論客登張

竹風氏、厭妻的小説といへる熟語を新造せり
、花袋の「男子が三十四五歳になると、女房
が不好に成つたり、他の女が好きになつたり

するものだ。」と「蒲團」に書きたる説が、新造語の成れる一原因なるもの、如し、自然主義にカブれたる一派の作家が、好んで厭妻的小説を發表せるは事實なり、而かも時代の反映することを思へば、吾人悚然として粟するを禁じ能はず。自然主義の勃興、厭妻的風潮の瀾満は、抽き難き時代の勢力として、侮るべからざるもの乎。

○ホトトギスの革命 俳句雑誌ホトトギスは爾後小説寫生文等に全力を傾けんとすと云ふ。

俳句の外に何物をも認めざりし一派の俳人は、變節と呼びて攻撃到らざるなし。然れども今も、俳句は過去の遺玉として、永く珍

重せられんのみ、將來の發展は殆んど餘地を剩さざるに似たり。虚子氏の慧眼夙くも爰に及びて擧を先じたるは近頃痛快の至りなり、

俳友諸子以て如何となす。

○外國文學の研究 翻譯事業は漸やく世の認むる所となり、諸種の文學雜誌亦、外國文學の紹介に努めざるはなし。吾人は、聖代の一盛事として謳歌せざる能はず。小山内薫氏の主幹の下に、新に「新思潮」の生れたるも、二葉亭四迷氏の復活せるも、新進の俊才が外國文學の趣味吸收に駛せ集れるも、孰れか好傾向として祝せざるを得んや。

青山忽已曙

明賀溪南

わで人よあまりに寒き心ぞといつはりも云ふ
我を呪ふや

森脇桃村

うばたまの暗き夜なれどわが心君をたもへば
稻光する

わゝ額に鐵鎖を措きぬ戰慄す戀ふべからざる
君をおもひて

大屋左一

いたづらに後のさかぬをつきぬ世を語らじみ
手を今したまへば

木村秋浦

悪性のみなぎる潮地ひいきてせまると思ふ海
ゆく日かな

帷幄に妙樂すなりとこしへのみ扇や今明く心
をとりぬ

後藤藤朗

花蔦は秋の帝の宮ばしら丹塗ると幹をひたす
らに巻く

秋の風そばの花よりものうげに牛ひく男等の
十の群ふく

大河ゆるし朝のかせ吹く帆の中に朗々として
君もうたひぬ

秋ゆくと風も木の葉も地をめぐり行道すなり

(9)

山藤 信吉

日あたりの襟にならべる鉢植の白菊愛でぬわ
がかもふ人

風をりく葉蘭に来るそよぎにも忘れし人の
れもかげに立つ

苔あをさ石のきざはし十五段芙蓉のごとく君
のほり行く

河野 翠漱

しら玉の少女は百の愛でびとにいつかれ給ふ
われ泣きて居り

菅原 紅雨

「傷ましき心の破れ」かく歌ひ夜毎われ泣く小

ひさき心

うき人と君は恨まむ思はるる身にしてまたも
他人を戀ふ

あはれなる少女よかくも殘忍の我と知りつゝ
なほ忘れ得ぬ

「苅りすてよ」「さなのたまひと蕭殺の心に匂
ふ愁の千花」

百餘日相見ぬ嫉みとこしへに逢はじと欲りす
あさましさかな

暗澹に世界にひとり鞭ちてさまよふことし追
憶に泣く

あゝ憂ひ嘆き喜びさまくの夢にいだかれひ
とせを經ぬ

(10)

(11)

作詩の時

翠激生

歌を作る時と場所とは、人々によつて各々異つて居る。習慣にも由らう、資質にも由らう、又職務に在る人の餘義なくされる時間上の關係にも由らう。道を行く時、業を執る時、寝たる時、朝、晝、夜、浴みする時、膳に向ふ時、酒飲む時、談話の時——千差萬別だ。そこで余は何うかと云ふに、机に凭つて、専念に詩を作らんと初めより用意してかゝる時の外は、決して出來ぬ質だ、諸君のは如何

靜夜

明賀溪南

あなさびし夜の街、
病院の灯影消ゆ。

かかる時、闇の中より
つと出でし者こそあれや。

すた／＼と小走りて、
橋の根に立ち止まる。

ふっ、ふっ、云ひ知らぬ
物の聲——斷續す。

(12)

▲銀鈴新春號作篇募集▼

本誌は次號を以つて新春號とし、体裁の一新と共に内容の改善を加へむため、社友および大方諸君の玉作を募る。

一 投稿の種類は小説詩歌俳句譯文評論美文等政治時事に涉らざる限り範圍を廣からしむ。

一 締切は嚴に十二月十五日。字數・行數等に制限無し。用紙は必ず半紙全葉の事。

▲寄贈新刊

△あやめ△山鳩(四十四)△五加

木△藻の花(四の六)△朝虹(三の十)△彩雲(一)△

中央文壇△葦附(九)△お伽世界△明ボノ

▲社告 △本誌は別項の通り次號十二月の

卷を休刊し、一月は發行日を繰上げて、元旦

勿々諸君と見ゆる積りである。全號が如何に

光彩奕々新様の体裁を以て現はれるかは、發

行の日を待つて判せられんことを希望する。

△最近入社の社友は山藤信吉玉利貞治の二氏

である。

▲社友募集 我社は諸君の高助によつて社

友の増加せんことを望む、六ヶ月分誌代廿五

錢前納の人は直に社友に列し得る規程だ。

銀鈴 三冊郵稅共拾參錢六冊全前金貳拾五錢
廣告料 一行拾錢 半頁前金六拾錢 一頁壹圓

明治四十年十一月廿三日印刷
明治四十年十一月廿五日發行 (銀鈴廿七號)

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人 河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人 木村柳三郎
印刷所 赤名活版所

發行所 石見國邑智郡田所村 銀鈴社

明治三十七年一月十四日第三種郵
便物認可(每月一回二十五日發行)
明治四十年十一月二十五日發行